

### 3. 11東日本大震災の支援ボランティア活動を続ける 立高のOB・OGたち



元気になった湊小の2年生



湊小のプールにも車の残骸が残っていた



津波が引いた湊小の教室

昨年2011年3月11日に起こった東日本大震災に、私たちはどれほど震撼させられたことでしょうか。とりわけ、**マグニチュード9.0**というとてつもなく大きな地震と、**10～15mもの大津波**が襲いかかった東北沿岸部のあの映像の恐怖、**行方不明者を含めて18,000人を超す膨大な数の死者**、破壊された福島第二原発による**放射性物質による汚染**……。これらは、今なお恐れと不安の記憶を私たちに焼き付けています。

それから一年半が過ぎましたが、被災地の復興は残念ながらほとんど進んでいません。津波災害を受けた町や住宅地、農地の大半は人気のない荒れ地として放置され、破壊された家屋や潰された自動車の瓦礫が積み上げられたままになっています。

立高生の皆さんや卒業生の中にも、夏休みや冬休みなどに被災地での瓦礫の片付けを始めとするさまざまな支援や、ボランティア活動に参加された方がおられるでしょう。

その中で、昨年の5月以来ずっと被災地宮城県石巻市に出かけ、さる小学校の子どもたちや教職員への支援を交代で続けている立高卒業生がいます。現在60歳半ばを過ぎた**高校16期のOB・OGの有志が中心的に活動している、通称「東京サポート」(石巻・湊小学校を応援する東京の会)**です。

#### ○どんな小学校なのか？

支援しているのは、生徒数140人ほどの**石巻市立の湊小学校**です。3.11の大地震直後、校庭に避難していた湊小学校の全生徒は津波に襲われました。間一髪、全員が校舎へ駆け込んで四階まで逃げましたが、子どもたちが目にしたのは、家屋や車もろとも次々と校舎に襲いかかる津波と、それに飲み込まれる人たちの絶望的なシーンでした。

そして校舎は2000人を超す被災者で溢れかえり、地域の避難所となりました。自分以外の家族全員を失った生徒、母親や父親、ペットを失った子がいます。そして授業に必要な教科書やノート、鉛筆、学校も校具や教具、資料のすべてを失い、校舎も校庭も使うことができません。ようやく避難民が仮設住宅に移れるようになった今も、校舎修復のために自分たちの学校へ通うことができません。震災以来ずっと、津波被害が軽微だった遠方の中学校での不自由な間借り生活を強いられたままです。

#### ○どんな支援をしているのか？

(1)東京サポートの立高OB・OGたちは、当初は避難所や寺、現在は安アパートを借りて自炊寝泊まりしつつ、災害による直接間接の影響による情緒不安などで、授業になかなか向き合えない子どもたちと一緒に授業を受けたり遊んだりして、子どもたちに寄り添っています。

(2)また教具や学校資料を失った教職員の授業の準備や、資料作りの手伝い、運動会などの学校行事の準備・運営音楽イベントの開催などの支援をさまざまに行なっています。

#### ◎震災後2年半(2013年9月)の最新状況

この東京サポートの呼びかけに、これまで小学生から中学・高校・大学の学生、そして80歳の高齢者をも含む一般社会人の多くが参画してくれました。湊小学校もようやく改修工事が始まり、来春の新学期から現在の地で授業が再開される予定です。2年ずつ進級した子どもたちにも落ち着きが出てきましたが、学力の低下が著しく、未だにトラウマを抱えて心が不安定だったり、震災以後に持ち上がった両親の離婚などに耐えている子どもも少なくありません。津波被害の激しかった地域は相変わらず荒地のままほったらかしにされ、戻れる家も家族もありません。しかし、なんとか一步は踏み出されたように思えます。私たちの活動がいつまで続くのかはわかりませんが、見届けることはきちんとしたいと考えています。まだまだ支援の手は不足しています。

(東京サポート代表: 松田隆夫: 立川高校16期卒業: 090-9382-5002)